

静岡県 三ヶ日町農協

〒431-14 静岡県引佐郡三ヶ日町三ヶ日3-885 ☎053(525)1011



三ヶ日町農協の後藤幹夫組合長

冬のミカン・シーズンになると、スーパーや果物店での試食販売が恒例行事のようになってきた。長崎の「多良和」、熊本の「河内」、愛媛の「西宇和」、静岡の「三ヶ日ミカン」など横綱クラスのミカン産地の段ボール箱が所狭しと並ぶ。産地名で消費者が商品を選ぶのは、果物の中でもミカンだけ、それだけミカンの産地間競争が激しい表れでもある。

「色よし、味よし、日持ちよし」のキヤッチフレーズで、三ヶ日ミカンのブランドが、家庭の主婦にまで定着するようになったのは、約半世紀に及ぶ徹底した三ヶ日町農協（後藤幹夫組合長、正組合員数1793戸）の営農指導と品質管理にある。三ヶ日ブランドが確立されるまでの苦労について、自らも5・5haのミカン園を経営する後藤組合長は、

ルール違反に脱退勧告

三ヶ日町柑橘出荷組合を設立 徹底した品質管理が成功の鍵

「農協では、『腰高』、『浮き皮』、『スレ』など見栄えの悪いものは絶対に出荷させません。精度も重要なチェック項目になっていて10度以下は受け付けません。粗悪品を選果場に持ち込んだ生産者には、規定によりペナルティ（罰則）が課せられます。過不足が許されるのは5%以内と決めています。出荷量の過不足も当然ペナルティの対象となります。農協で決めたルールは組合員にきちんと守っていただきます。ルールに違反した場合は脱退勧告することもあり得ます」と言い切る。

この厳格な選果が、三ヶ日ミカンの品質を高め、市場の絶大な信頼を勝ち得る最大のポイントとなったことは言うまでもない。農協の組織力で徹底した品質管理体制を築いてきたと言えるのではないだろうか。

三ヶ日町農協のミカンの品質管理は少々複雑な体制で行われている。後藤組合長に尋ねると、「実はミカンに関して農協は『ノータッチ』なんです。農協の選果場はすべて出荷組合に貸しています。運営もすべて出荷組合が行います」

専業が支える品質管理

三ヶ日町農協の正組合員のうち三ヶ日町柑橘出荷組合に加入する農家は1001

という答えが戻ってきた。農協の中に出荷組合があるのは屋上屋を重ねる組織ではないか。そう思っただけで疑問をぶつけると、「出荷組合ができたのは昭和35年ですが、それまでは商人の方が力が強く、農協にはミカンが集まりませんでした。こんなことをやっていたら、農協は商人に搾取されるだけと危機感を募らせ、組合員農家が結集して商人に対抗すべき組織を作るべきだということで出荷組合が設立されました」という答えだった。

農協の中に出荷組合が設立されるのは、別段珍しくもないが、三ヶ日町農協のように、ミカンの選果と販売に関しては出荷組合がすべてを取り仕切っているのは、全国でも珍しい例だと言われている。出荷組合長は、もちろん組合員農家から選ばれるが、出荷組合の運営に関しては、農協の役員といえども一切口出しができない仕組みになっている。農協が担当するのはミカン生産の技術指導など営農面だけだという。



農業評論家

土門 剛

どもん・たけし/1947年（昭和22）、大阪生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」（日経フィナンシャル94）、93年10月「市場開放決断の日」（日本経済新聞）、92年11月「農協が倒産する日」（東洋経済新報社）「穀物メジャー」（共著・家の光協会）、「東京をどうする、日本をどうする」（通産省八幡和男氏と共著・講談社）などがある。農業や農協問題で規制緩和と国際化の視点からの論文多数。「中央公論」94年3月号「省益に走った農水官僚の100日」、「THIS IS 読売」94年3月号「食管理権をめぐる悪の構図」、「週刊東洋経済」93年12月18日号「食管理死守で焼け太る農水官僚」、94年7月18日号「懸案見送られた食管理改革」、「エコノミスト」94年8月30日号「食管理制度のあり方に関する調査懇談会」。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」の各委員を歴任。

良い農協はここが違う！
エクセレント農協探訪記

7戸。正組合員に対して約57%の加入率だ。経営形態別では、専業農家が325戸、第一種兼業農家は320戸、いずれも正組合員に対して18%の比率である。後藤組合長は、

「三ヶ日町内で生産されるミカンは年間4万3000t、このうち出荷組合の共選場で扱うマルエム・マークのついたミカンは3万6000トンあります。その7割は専業農家によって生産されています。三ヶ日町の産地ブランドが維持できるのは、熱心な専業農家によって支えられていると思いますね。第二種兼業農家は高齢化や後継者不足などで減る傾向にありますが、一方で専業農家が規模拡大を図っていますので出荷量の面では影響はないと思います」と説明する。

ちなみに農協資料によると、ミカン園の平均耕作面積は2・7ha。7haという規模の大きいミカン園もある。平均的なミカン園で労力は2・5人から3人。これで平均粗収入、つまり農家手取りは1650万円あるという。所得率が50%として半分は経費に消えてしまう。残り半分の800万円から900万円が純利益となる。

いま、三ヶ日町のミカンは端境期にある。20年前に青島への品種切り替えが進んだため樹齢構成が若いからだ。全品種の樹齢は5年生までが19・5%、10年生までは19・1%。青島の場合は10年生以下の樹齢が50・5%という構成だ。未成木が半分近くあるため収量は伸びないが、この時期を過ぎると単収も上がってくる。これにコストダウンを実現すれば、

60%ぐらいの所得率を確保することは夢ではない。これが農協の計算だ。

農協の営農指導は営農部柑橘課が担当、1・8haの試験圃場もある。出荷組合の品質管理体制に呼応すべく技術指導も徹底している。担当の山村新平課長は、「農協の技術指導と出荷組合の選果と販売は車の両輪のようなものです」とたえる。

青島温州を導入した時もそうだった。柑橘課は、導入時に1本1本個体調査を実施してきた。品質的に問題ある不良木はすべて淘汰することを決めた。木のチェックには農協の専門技術員6名が、苗木を植えて実がなり始めた時に1本1本チェックする。

山村課長の説明では、木を1本1本丹念にチェックする農協は他産地でもないということだ。チェックを受けていない

木から収穫されたミカンが、共選場に持ち込まれても、出荷組合から「これは青島温州では扱えない」と判定されてしまう。

傾斜地の園内道整備

三ヶ日ミカンにとって今後の最重要課題は、省力化のためのミカン園の基盤整備にある。具体的には大型の防除用スピードスプレーヤーが走れる園地の整備である。山村課長によると、全国のミカン産地で導入されたスピードスプレーヤーは約500台、このうち三ヶ日町農協管内には86台導入されている。山村課長の説明では、「三ヶ日町はほとんど気象災害がありません。それに比べ他産地は台風など天然災害を受けています。その差がミカン農家の所得向上に結びつき、農家の投資意欲を支えてきました」という。

そのスピードスプレーヤーは、1台450万円ぐらい。園内道走るので園内道の整備も必要となる。急傾斜地が多いミカン園の園内道は等高線に従って作らなければならない。費用もかかるが専業農家は土木作業に欠かせない小型ユンボを持っている。

スピードスプレーヤー導入のメリットは計り知れない。山村課長の説明では、まず農薬散布の労力が5分の1になり、効果的な農薬散布が可能のため農薬散布量も半分で済む。低農薬の高品質生産が可能になる。

また将来の後継者難など労力不足を考えた場合、夏場でもスピードスプレーヤーで作業ができるのは画期的なことだという。スピードスプレーヤー用に園内道を整備することは収穫物の運搬作業も楽になるメリットがある。収穫時期にパートを雇う費用も馬鹿にならないからだ。

後藤組合長は今後の営農戦略について、「どの産地も省力化、省力化と叫びながら、思い切った省力化投資が実施できなかったようです。それは農家に資本ストックがなかったからではないでしょうか。それに比べ、三ヶ日町の組合員農家はストックを持っています。組合員の貯金率も高く、平均2500万円は持っているでしょう。産地間競争が国際的な規模で繰り広げられる中で、もつとも重要なことは国際化、自由化時代に生き残れる高品質生産と低コスト化を実現することです。これができるのは三ヶ日町のミカン農家しかないと考えています。僕らも必死なんですよ」と抱負を語る。



農協の中に設立された柑橘出荷組合の組合員たち



スピードスプレーヤーでミカンの木を管理